（資料4－3）

スケトウダラ根室海峡
研究機関会議結果

国立研究開発法人　水産研究・教育機構

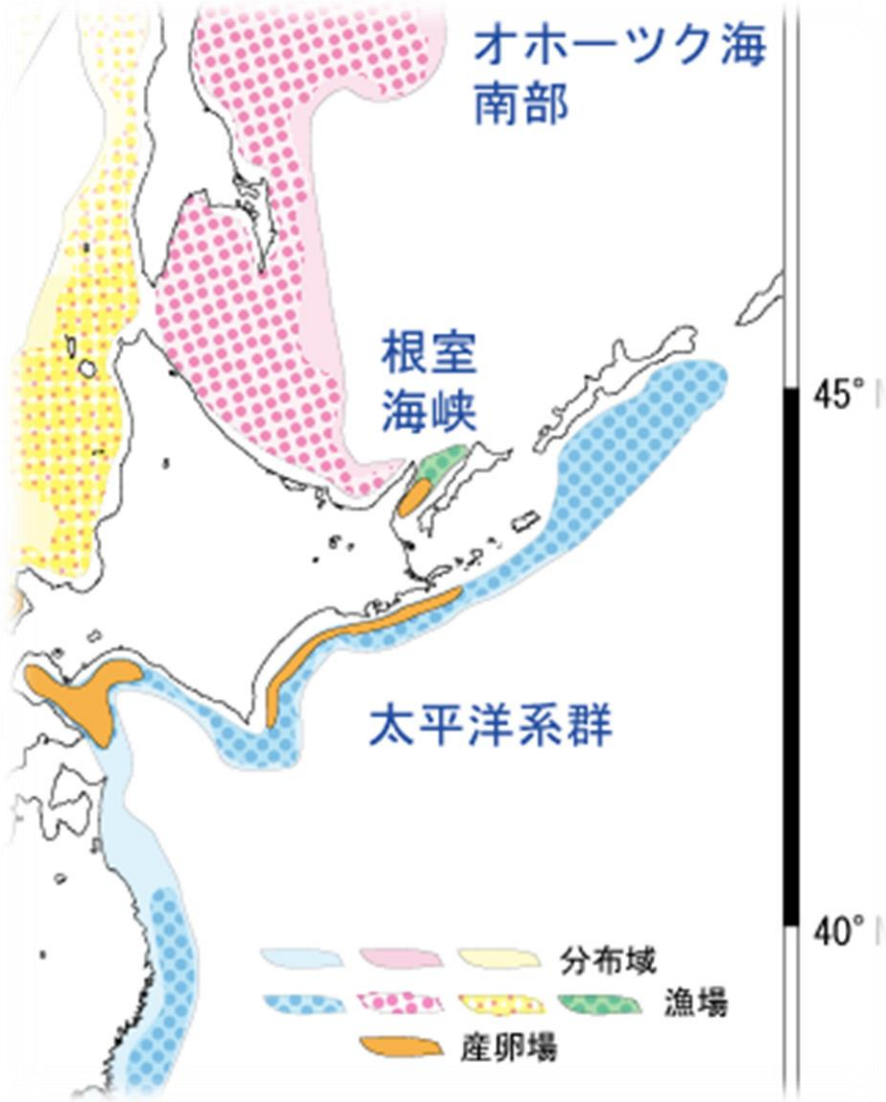
内容

1．スケトウダラ根室海峡の令和2年度資源評価結果

2．資源管理目標等を導入した「新たな資源評価」について

3．スケトウダラ根室海峡の漁獲管理規則等の提案について

スケトウダラ根室海峡の分布・回遊状況



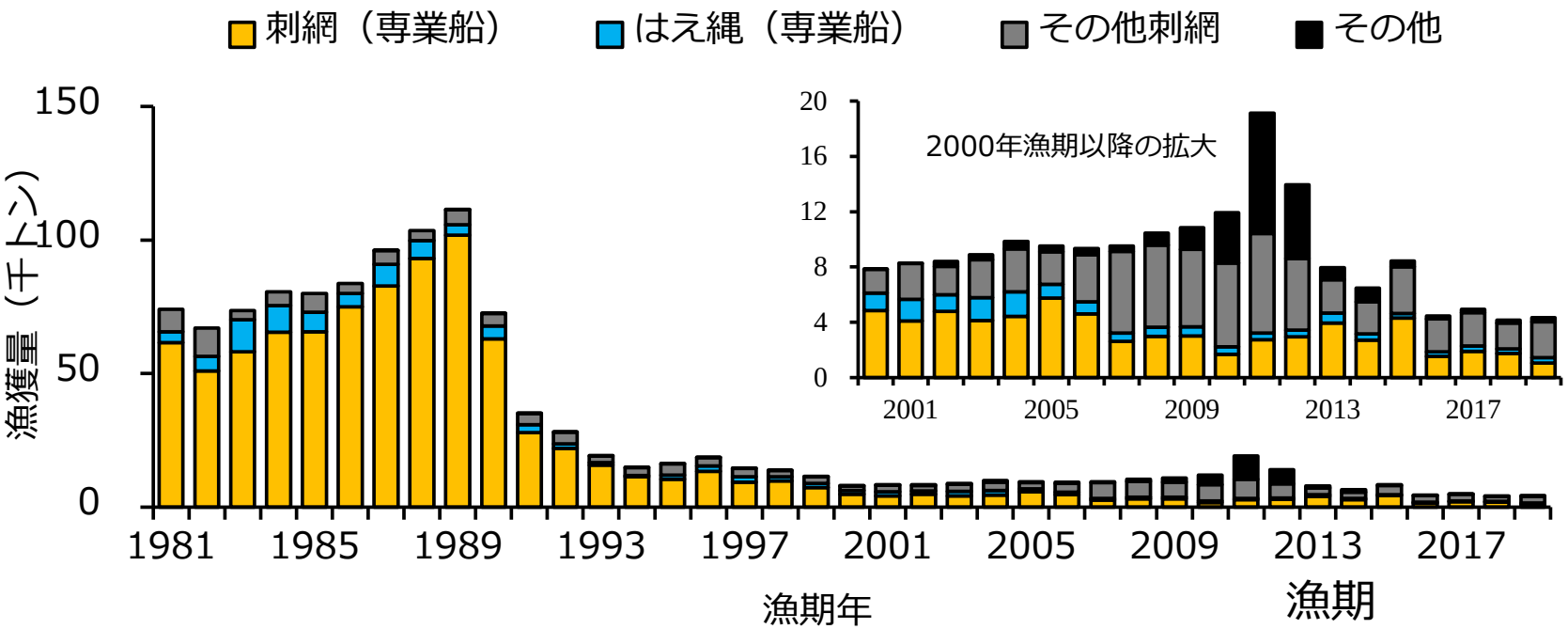
分布・回遊等

- 産卵のため冬季に根室海峡へ来遊する群れが主体
- 産卵期以外は主にオホーツク海南西部に分布すると推測される跨り資源

産卵場

- 根室海峡に産卵場は存在するが、四島周辺海域など他の水域の産卵場については詳細不明。
- 産卵期は１～4月

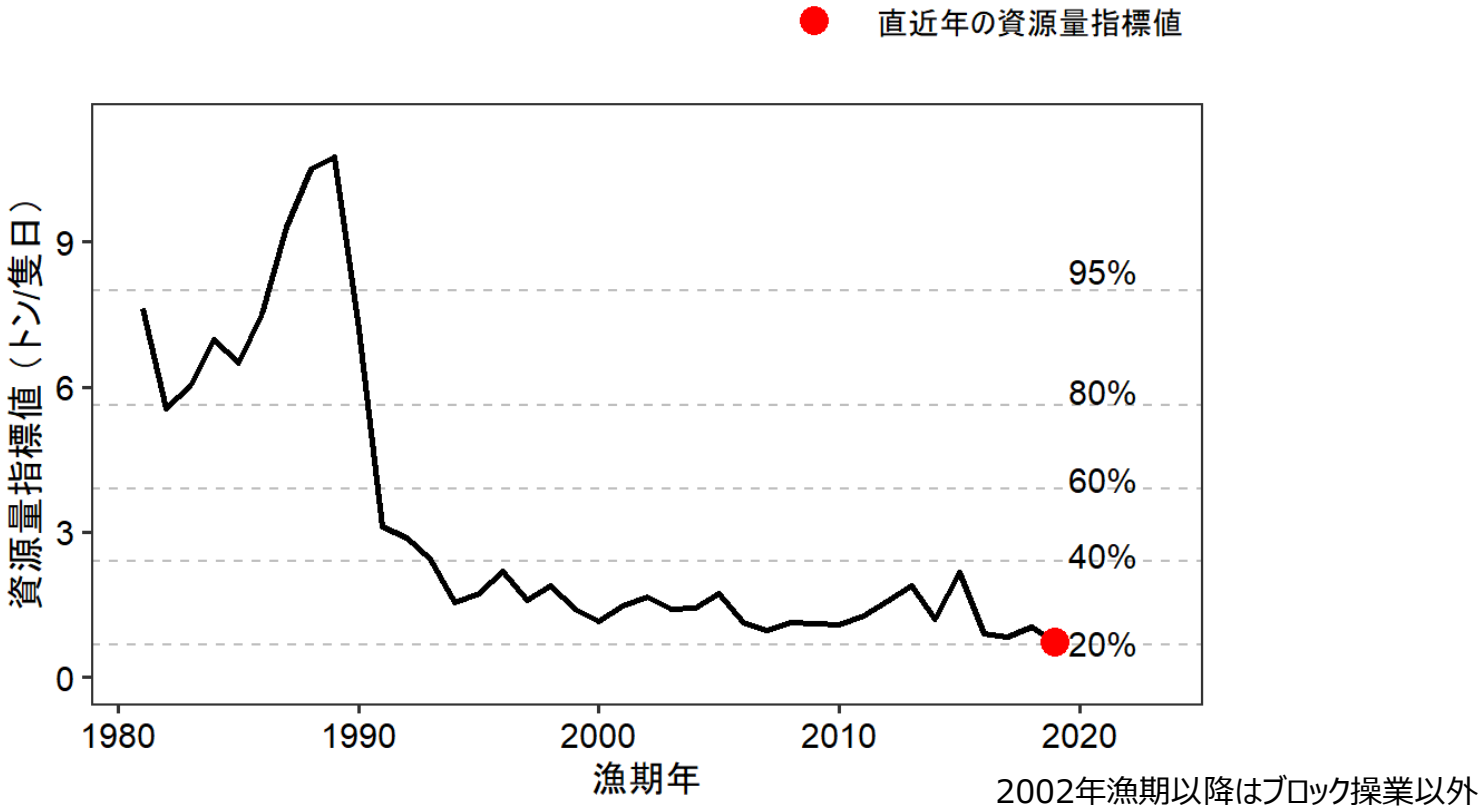
漁獲量の推移



漁期
4月～翌年3月

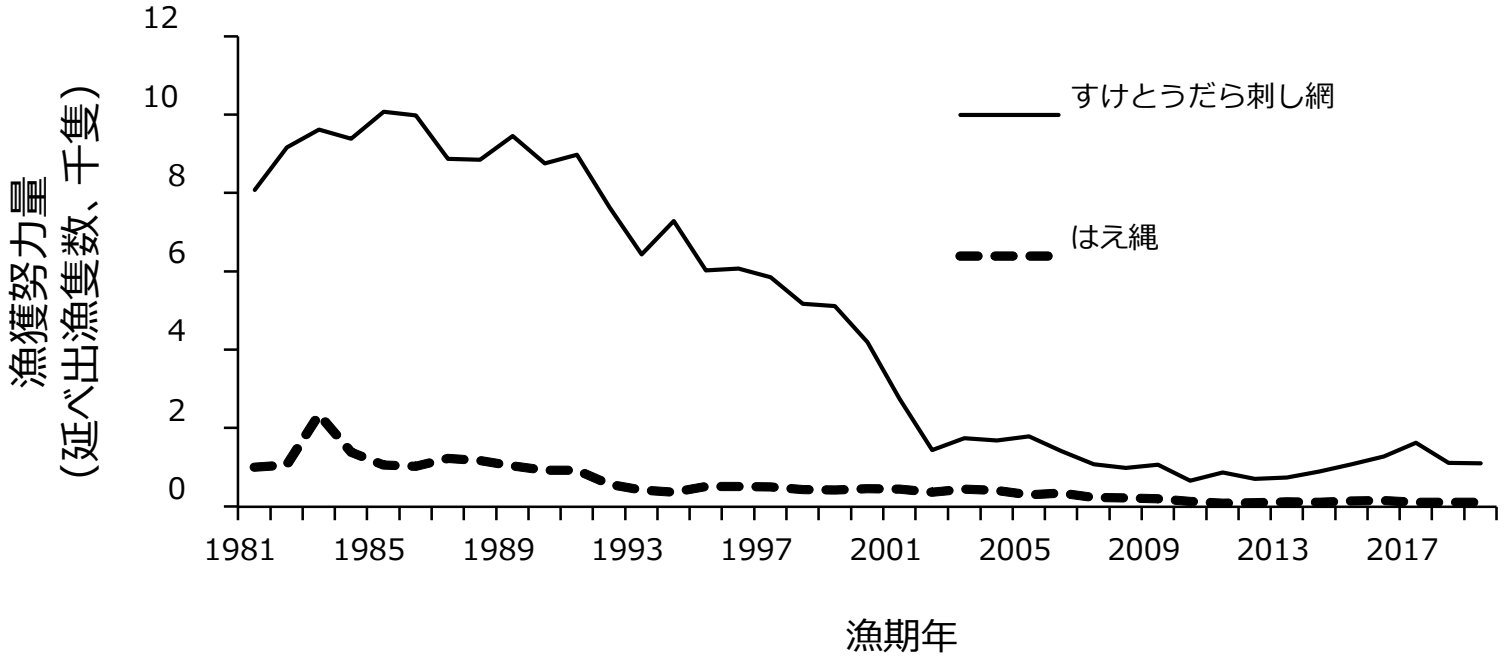
- 漁獲量の大部分は、刺網と延縄による。
- 総漁獲量は、1980年代には67千～111千トンと多かったが、1989年漁期の111千トンを最高に、その後急激に減少した。
- 2000年漁期に10千トンを下回ったが、その後緩やかに増加して、2011年漁期には19千トンに達した。しかし、2012年以降は再び減少している。
- 2019年漁期は、過去最低に近い4.3千トンであった。

資源量指標値の推移



- 資源量指標値は、すけとうだら刺網漁業のCPUEを用いる。
- CPUEは、1989年の10.8（トン/隻日）を最高に、その後急激に減少しており、2016年漁期以降は1.0トン/隻日を下回っている。
- 2019年漁期のCPUEは0.71トン/隻日であり、過去最低値である。

漁獲努力量の推移



- 漁獲努力量はすけとうだら刺網の延べ出漁隻日数。
- すけとうだら刺網では2002年漁期まで大きく減少してその後はほぼ横ばい。
- 2019年漁期は、すけとうだら刺網では1,098隻日で前年並み、はえ縄では117隻日で前年と同数であった。
- すけとうだら刺網では、2002年漁期から複数の経営体がグループを作り、代表の一隻が操業するブロック操業が本格的に導入されていたが、近年は漁獲が低迷している。

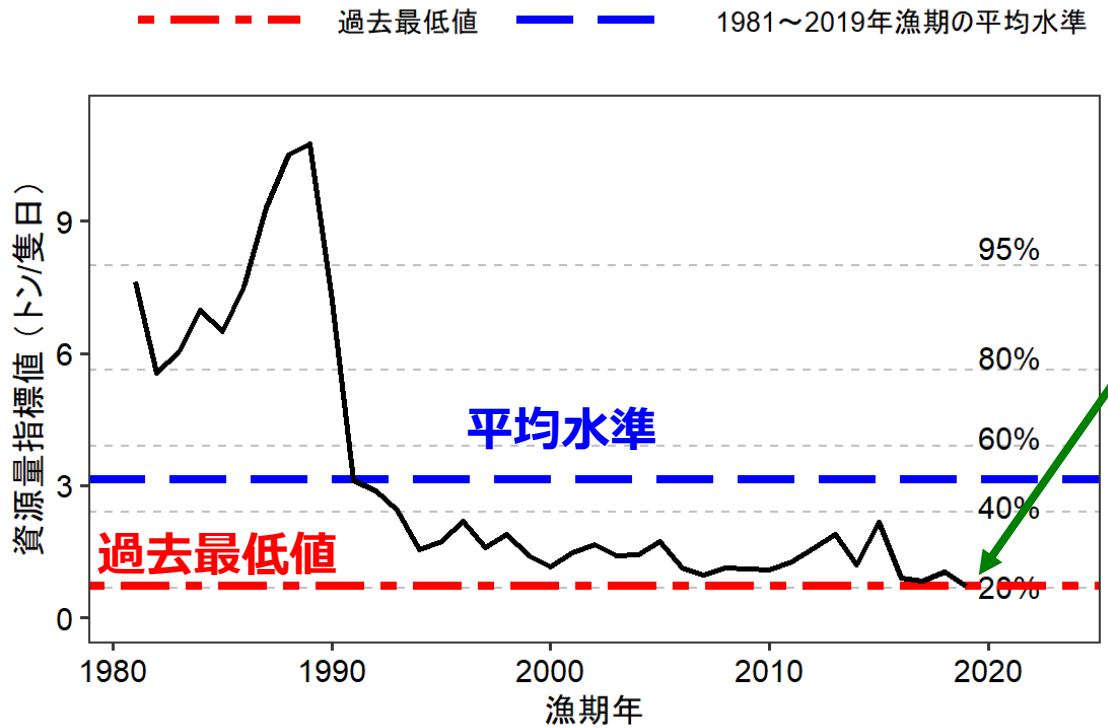
漁獲管理規則等の提案について

- 本資源は隣接水域に跨って分布し、日本漁船の操業水域には主に産卵のために生活史の一時期に来遊すると考えられる。

- 隣接水域内での本資源の再生産や加入、外国漁船による漁獲状況は不明であり、日本漁船の操業水域における情報のみでは漁獲圧や資源量などを定量的に評価することが難しい。

「漁獲管理規則およびABC算定のための基本指針」に従い計算される**管理基準値案に基づく漁獲管理規則の提案は困難である。**
本資源では、来遊量の年変動に配慮しながら漁獲を管理することが重要である。

資源管理方針に関する検討のための代替値



2019年漁期
CPUE：
0.71トン/隻日

50%, 3.14トン/隻日

20%, 0.71トン/隻日

- 資源量指標値（近年の漁獲主体であるすけとうだら刺網CPUEを選択）を資源の来遊量の指標と考えて、その資源量指標値に累積正規分布を適用して算出された「平均水準」、「過去最低値」を評価の基準にすることを提案する。
- **平均水準**は、資源量指標値の50%水準で3.14（トン/隻日）
- **過去最低値**は、資源量指標値の20%水準で0.71（トン/隻日）
- 2019年漁期の資源量指標値は、**平均水準を下回り、過去最低値。**